

月日のたつのははやいもので、荒池のあばらやにおちついてから、はやくも十余年が過ぎました。

安積の大地はつきつきに水田がひらかれていきました。須賀川の近くの仁井田村まで、疏水の水は流れていきました。間もなく須賀川まで流れることだろう、と久敬は思いました。



小林久敬

「あらたのし田毎ごとにうつる月のかげ」という句は、田に水がみちあふれているようすをよんだ句です。久敬の喜びの姿すがたがしのばれます。

明治二十五年五月二十一日、久敬は病が重くなり、郡山の如宝寺にょほうじの偉いお坊さんえらの